

KONAN UNIVERSITY

## ご挨拶 (2006年度 公開シンポジウム報告 育てることの困難 - 家族・教育・仕事の今を考える)

著者	穂刈 千恵, 森 茂起, 高石 恭子
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	8
ページ	5-7
発行年	2007-02-14
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002595">http://doi.org/10.14990/00002595</a>

## ご挨拶

司会 徳莉 千恵  
所長 森 茂起  
企画者 高石 恭子

**穂莉** 本日司会を担当します甲南大学文学部人間科学科の穂莉と申します。シンポジウム運営の仕事をするのは今年度が初めてなので、至らぬこともあるかと思いますが、最後までよろしくおつき合ってください。はじめに、甲南大学人間科学研究所所長の森より一言ご挨拶申し上げます。

**森** 甲南大学人間科学研究所の所長を務めております森と申します。本日はようこそおいでくださいました。人間科学研究所の研究事業は、文部科学省の学術フロンティア推進事業に二期連続採択され、現在通算九年目に入っております。そのなかで公開シンポジウムを開催してまいりまして、今日のシンポジウムが七回目となります。甲南大学では三〇年以上にわたって母子臨床の実践・研究を積み重ねてきました。それらの成果は私どもの研究所に引き継がれており、今回の「育てることの困難」というテーマはその集大成的な意味も持っています。

「育てることの困難」は、ごく一般的な言葉に思われるかも

しませんが、実は選ぶのにかなり苦労しました。この言葉は、子育てだけではなく、育てること一般を幅広くとらえようとするものです。サブテーマが「家族・教育・仕事の今を考える」となっているのはそのためです。「育てること」という言葉はやや収まりが悪く、もう少し格好のいい名前はないかと、皆でかなり知恵をしまりましたが、「育てること」を一語で言い当てる言葉が日本語にありません。大人に対してならば「人材育成」という言葉もありますが、「育成」では限定された場面でしか使えませんし、「子育て」という言葉では子どもだけが対象となります。育てること一般を表す名詞がないというのがまた面白いところだと思います。その辺も皆さま方の頭の隅に置いていただきなながら、今日は育てることについて考えていただければと思っております。では、これですべての挨拶とさせていただきます。

**穂莉** 続きまして、今年度のシンポジウムの企画とコーディネートを担当している高石から趣旨についてお話いたします。

**高石** 高石です。よろしくお願いたします。「育てること」という言葉を巡る議論については森所長から説明がありましたように、今回私どもはこのシンポジウムを企画するに当たっていろいろ考えてきました。企画趣旨は案内のポスターやチラシに書いてありますが、もう少し補足しながら、コーディネーターの立場でご説明させていただきます。

最近若い人がなかなか結婚しないとか、結婚しても進んで

子どもを産まないとか、晩婚化、少子化の問題が社会レベル、国家レベルでも議論されていますが、せっかく子どもを産んでも、虐待したり、時には死に至らしめてしまったりと、なかなかうまくいっていないのが今日の日本の現状ではないかと思えます。つい最近も、自分の娘を殺し、それだけではなく、娘の友達の子まで殺してしまった秋田県の女性の事件が明るみに出て、連日のように報道されています。親子だけではなくて、教師が生徒を殺してしまうとか、生徒が教師を殺すといった、育てる者と育てられる者の二つの世代の間に何か深い断絶が起きているような気がしてなりません。

育てることは悠久の昔から自然にやってきた営みのはずですが、それがどうも自然にはうまくいかなくなっている。どうして現代は育てることが難しい時代になってしまったのか。ひょっとしたらこの問いは、「なぜ現代人は生きるのが難しいのか」ぐらい無謀な問いの立て方かもしれないし、答えはそう簡単に見つからないかもしれないし、それでも私たちはやっぱり問い続けなければなりません。それでも私たちは恵を出し合って考えていくことが必要だと思っています。

私自身は三年ほど前から、ある企業が開設している子育て支援のインターネットのサイトで心の相談室の回答を担当しています。そちらには年間五〇〇件ほどの相談が寄せられますが、その典型的な内容は、「遠くに離れて住む親には頼れない。夫は深夜まで働いていて帰ってこない。幼児と狭い場所向き合っていて、非常につらくて苦しくて追い詰められてしまっ、ついイライラして子どもをたたいてしまった。あ

るいは暴言を吐いてしまって、もう取りかえしがつかないトラウマを子どもに与えてしまった。自分は母親失格だ、どうしていいかわからない」というもので、時には「もう死にたい」という深刻な内容もあります。

そういった母子の孤立状況を何とか打開しようということ、二〇〇〇年ぐらいから草の根のレベルではいろいろな支援が広がってきてはいると思います。甲南大学カウンセリングセンターでも、二〇〇〇年度の秋から子育て支援の事業が立ち上がりました。現在も人間科学研究所と共催しながら、いろいろな活動に取り組んでいます。年間延べ数百名の方々が、講演会や子育てサークル、親子相談の場に足を運んでいらっしゃる状況です。まだまだニーズはあるという気がしています。

しかし一方、国家レベルや行政レベルで次々と出されてくる支援は、出産の費用の無料化であるとか、保育所の待機児童をゼロにするとか、延長保育をするとか、あるいは児童手当を増額するとか、「小手先の」と言ったらいいか、「場当たり的」と言ったらいいか、非常に表面的な施策にしかならないような気がします。本当のところをどうしたらいいのかというところにはほど遠いところで動いているような気がします。そのあたりを考えるためには、もっともつと掘り下げていろいろな次元からこの問題を考え、人間の心の奥深くまで探ってみるような試みも必要ではないかと思っています。ここまでは乳幼児のいわゆる子育ての話ですが、一方で、学生期の成人になった子どもをどうやって育て上げるかとい

うことも、今は非常に見えにくくなっています。私自身ここ十数年、甲南大学で学生相談の専任カウンセラーとして相談活動をしており、子育ての問題は決して乳幼児に限られたことではないことを実感しています。

そのなかで一番対応が難しかったと思うのは、ひきこもりの子どもさんたちとそれを抱える親御さんたちの相談でした。成人はしたものの社会にうまく出ていけない——これは孤立した母子密着の中で育ってきた子どもたちの結末といえますか、根っこは乳幼児の子育てと同じところにあるような気がしてならないわけです。

今回のシンポジウムではそういった視点を踏まえながら、育てることを小さな子どもに限らず、誕生から成人して巣立っていくまでの全体的な営みとしてトータルにとらえてみたいと思います。親子に限らず、上の世代から下の世代に何をどう引き継いでいくのかということ、そういったことを踏まえながら、いろいろな次元から探ってみようということです。今日は、現代社会において育てるのがこれほど困難になったのはいったいなぜなのか、何が必要とされているだろうかということを、家族・教育・仕事、そして何よりも「心」という見地から、フロアの皆さまと一緒に考えてみたいと思います。明確な答えを出すことを期待しているわけではなくて、いろいろな方面から探りを入れてみて、皆さまご自身がそれぞれ、これがヒントになるかなということを見つけていただけたらうれしいと思います。

長くなりましたが、この辺りで終わらせていただきます。

**穂刈** 今、高石から企画趣旨について詳しくお話しいたしました。フロアにいらつしやる皆さまになんらかの形で今日のシンポジウムの意味、そこに期待されているものが共有されているといいなと思います。それではただいまより第一回の講演を始めさせていただきます。どうぞよろしく願います。

